

第1章 鷹山の歴史

1 鷹山の歴史 一山の形態変化を中心に一

村上 忠喜

1 戦国期までの鷹山

鷹山は、応仁の乱前に出されていた山鉾のひとつである。明応9年（1500）に記された「祇園会山鉾事」（八坂神社文書）〔文献1〕に、応仁の乱前に出っていた山鉾として、「鷹つかい山 三条室町と西洞院間」とその名があがっている。この当時昇山であったのか曳山であったのかは定かではない。「三条室町と西洞院間」というのは、現在の町名で言えば、衣棚町と釜座町、そ

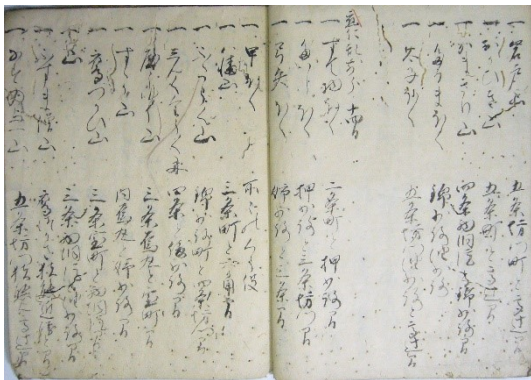


図1 「祇園会山鉾事」（八坂神社文書）〔文献1〕

して新町通を挟んだ両側町の町頭町と三条町の一部が入る。

「祇園会山鉾事」の続きには、室町幕府奉行人松田頼隆が、祖父の松田頼亮が明応9年の山鉾巡行再興時に書きとめたことを、後年の永禄3年

（1560）に書き写した記録が載っている。そこには、鷹山が、「三条室町西洞院の間二町」とあり、今でいう衣棚町と釜座町の2町が奉斎した山と考えられるが、いずれにしてもその形状はわからない。

16世紀中頃の祇園祭を描いた絵画史料である「日吉山王・祇園祭礼図屏風」（サントリー美術館、図2）〔絵画1〕には鷹山が描かれており、これが鷹山の形態を知ることのできる最古の画証である。山の下部は前景の家並みに隠れているので、車輪がついているかどうかはわからないが、舞台上に9名の人物が描かれていることから、この時期の鷹山は曳山形式であったことは間違いのないところであろう。

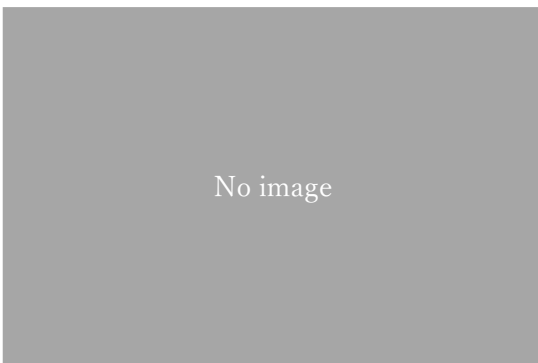


図2 「日吉山王・祇園祭礼図屏風」〔絵画1〕

同図の鷹山は、他の山同様に、松が2本山^{ほら}洞から立ち上がる「ふたつ山」として描かれる。戦国期の絵画史料に描かれる祇園祭の山は、昇山、曳山とも、大小の山洞を伴ったふたつ山に描かれ、それぞれの山に松（老松）が立ち上がる。ちなみに江戸初期以降の絵画史料では、ほぼすべての山は山洞がひとつだけの「ひとつ山」として描かれるので、中世から近世にかけて、山の形状はふたつ山からひとつ山へと変化したわけだが、その理由はまだ判然としない。現在でも黒主山のみふたつ山の形態を残しており、小さい山には桜を立てる。

さて、本図にみられる鷹遣や犬遣は、カルサン風の袴姿に、塗ではない笠（菅笠か）を被っている。樽負は笠も被らず、緋柄のような着物を着て、まだきちんと髻も結っていないように

みえる。両手で大きな粽を抱え込むように食べる態に描かれるのは、後年の樽負と同様の表現である。

注目すべきは、赤熊を被った者が2名、もしくは3名乗っていることである（1名は赤熊かどうかいまひとつはっきりしない）。その他に白装束の男性が3名乗る。赤熊が舞台上に乗るということは、舞台上で何らかの芸能が催されていた可能性が示唆される。しかしながらこれまでのところそうしたことを示す文字記録もなく、またこれ以外に赤熊が描かれた絵画史料もないので詳細はわからないものの、赤熊の存在は、鷹山がこの時期の他の山とはまた〈異質な性格〉を備えた山であった可能性を排除できなくしている。〈異質な性格〉というのは、疫神を招くという山本来の呪術的な性格に加えて、招いた神を慰撫し、囃したてるための芸能が舞台上でセットになっていた可能性が示唆されることから導かれる性格のことである。

2 17世紀～18世紀初頭



図3 「祇園祭礼図屏風」〔絵画2〕

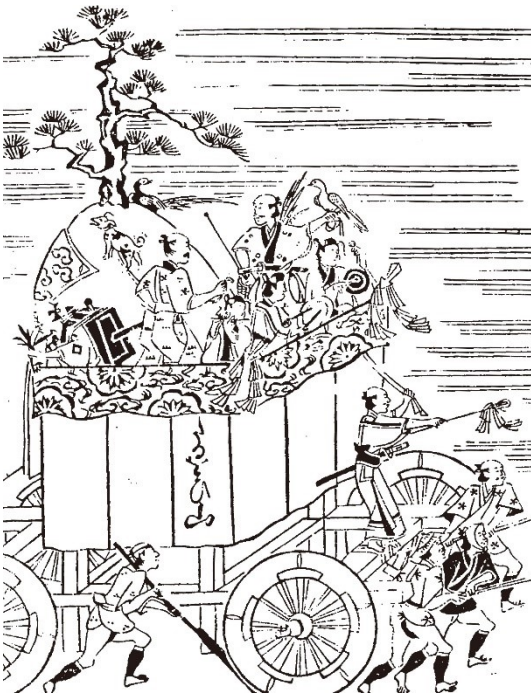


図4 『祇園御本地』〔絵画4〕

江戸時代に入ってから鷹山は、おそらくそれ以前からもそうであったであろうが、後祭のくじとらずの山として、最後尾の大船鉾の直前を巡行した。この段階を示す絵画史料が、寛永期（1624～44）前半に描かれたとされる「祇園祭礼図屏風」（京都国立博物館、図3）〔絵画2〕他何点か確認できる。特に京博本は、神幸祭と還幸祭、そして前祭と後祭の全山鉾を描いており、祇園祭を記録しようという意図が強く感じられる絵画である。その京博本では、大船鉾の前を行く鷹山が、左隻第2扇の下部に描かれている。

この頃の鷹山も当然曳山である。すでにひとつ山となっている。17世紀から18世紀初頭までの絵画史料は、先の京博本を入れて史料集に10作品を紹介している。『祇園御本地』（図4）〔絵画4〕の図様を做った^{（注1）}と考えられるものも多いので気をつけなくてはならないが、基本的には山の形状は変わっていない。

ただし、舞台上の人形や人物の表現には若干の相違が認められる。

京博本の舞台上には、鷹遣・犬遣・樽負の外に、太鼓・笛・鉦で囃す人々の姿が7名確認できる。鷹遣・犬遣・樽負の衣裳は、鷹遣・犬遣がカルサン風の袴姿で、刀をたばねている。白地に模様をついた着物を着た樽負は、下半身は水引に隠れて見えないが、手に大粽を持つ姿で描かれる。

太鼓方・笛方・鉦方は1名ずつ描かれ、鷹山もこの時期にはすでに、太鼓・笛・鉦によるお囃子が成立していたことを示している。

海北友雪が描いた「祇園祭礼図屏風」(八幡山保存会、制作年代17世紀後半)[絵画3]でも、鷹遣・犬遣・樽負はほぼ同様の表現であるが、それ以外の囃子方の表現は、頬かむりをしたり、諸肌脱ぎになったり、また高欄に顎をのせてふざけた風に描かれたりと、動きのある表現になっている。

『祇園祭会図偈』(正徳6年〈1716〉)[絵画12]以前の図様では、いずれも鷹遣・犬遣は袴をつけ、刀を差した武家姿で描かれる。樽負は座っていることから下半身が見えないが、特別な衣装を着けているようにはみられない。

髪型は、鷹遣・犬遣の2体は月代を剃って鬘を結った大人の男性で、舞台上の囃子方達の多くが若衆鬘を結った若衆姿に描かれているのと対照的である。樽負の髪型表現も、多くは鷹遣・犬遣同様月代を剃った大人の男性に描かれるが、「祇園祭礼図巻」(永青文庫)[絵画5]では、総髪のように描かれている。

3 18世紀中葉以後



図5 『祇園会細記』[絵画14]

曳山の形状が大きく変化するのが江戸中期である。それは、山洞の前に屋根がつくという形で表れた。画証としては、『祇園会細記』(宝暦7年〈1757〉刊)(図5)[絵画14]がある。この当時の曳山は、岩戸山、南北の観音山、そして鷹山の4基であるが、いずれも屋根をつけるという変化をみせ、宝暦7年段階では、4基とも山洞の前に簡易な屋根をつけるように描かれている。

4基の曳山の中で、最も早くに屋根を設置したのが鷹山で、寛保2年(1742)のことと考えられる。三条衣棚町には祇園祭の収支を記録した「祇園会入払帳」(三条衣棚町文書/京都府立京都学・歴史館 以下「三条衣棚町文書」と表記)が3冊残されており、元文4年(1739)から文化11年(1814)の間の75年間の鷹山に関する収支を知ることができる(「祇園会入払帳」〈三条衣棚町文書〉による支出入)。それによれば、前年の寛保

元年(1741)までの3年間は毎年の出費が422、446、406匁であったのが、寛保2年(1742)には2,699匁と5倍以上の出費となっている。また翌寛保3年(1743)の同記録には、「山ノ惣縁日覆ぬり代」として165匁の出費が計上されている。おそらくは寛保2年に作った白木の屋根に漆をかけたのであろう。

年		収入		支出		備考
元号	西暦	匁・分厘毛	匁・分厘毛	匁・分厘毛	匁・分厘毛	《 》内は他資料よりの補注
元文4年	1739	392,825	422,020			
元文5年	1740	312,230	446,500			
寛保元年	1741	343,280	406,350			
寛保2年	1742	873,780	2,699,710			前部に屋根（日覆い）がつく？
寛保3年	1743	393,180	667,500			日覆の塗
延享元年	1744	268,140	458,240			
延享2年	1745	238,850	481,420			
延享3年	1746	518,100	816,700			
延享4年	1747	1,271,896	2,513,270			懸装品を揃える/提灯立
延享5年	1748	293,500	503,000			
寛延2年	1749	251,050	519,500			
寛延3年	1750	283,170	536,850			
寛延4年	1751	286,350	456,950			
宝暦2年	1752	247,650	454,600			
宝暦3年	1753	159,310	393,760			
宝暦4年	1754	164,510	413,100			
宝暦5年	1755	256,090	792,500			
宝暦6年	1756	326,100	468,820			
宝暦7年	1757	831,890	1,466,500			
宝暦8年	1758	2,092,480	2,958,160			懸装品新調
宝暦9年	1759	246,415	430,220			
宝暦10年	1760	199,250	481,520			
宝暦11年	1761	205,850	617,170			
宝暦12年	1762	233,190	622,190			
宝暦13年	1763	254,540	491,790			
宝暦14年	1764	261,480	459,200			
明和2年	1765	246,750	579,420			
明和3年	1766	273,230	578,460			
明和4年	1767	287,110	526,380			
明和5年	1768	310,200	633,820			
明和6年	1769	305,950	499,220			
明和7年	1770	280,350	2,371,200			懸装品新調
明和8年	1771	346,220	817,596			
明和9年	1772	249,711	634,925			
安永2年	1773	234,990	678,180			
安永3年	1774	226,000	589,350			
安永4年	1775	269,270	1,028,100			
安永5年	1776	253,350	1,523,730			車輪新調
安永6年	1777	316,500	507,400			
安永7年	1778	198,400	674,960			
安永8年	1779	207,080	528,170			
安永9年	1780	184,150	688,840			
天明元年	1781	212,740	597,070			
天明2年	1782	738,500	11,140,050			山屋根新調
天明3年	1783	351,280	929,870			
天明4年	1784	391,000	832,460			
天明5年	1785	254,300	684,440			
天明6年	1786	213,230	717,710			
天明7年	1787	622,100	772,930			
天明8年	1788	291,000	1,056,940			《昇き山として巡行に参加》
寛政元年	1789	255,900	1,898,770			
寛政2年	1790	207,710	227,980			
寛政3年	1791	220,520	495,980			
寛政4年	1792	272,590	254,550			
寛政5年	1793	256,940	224,150			
寛政6年	1794	239,300	219,590			
寛政7年	1795	220,640	283,080			
寛政8年	1796	263,630	270,200			
寛政9年	1797	250,720	223,420			
寛政10年	1798	1,421,940	1,049,020			《曳山にもどす》
寛政11年	1799	254,380	806,500			
寛政12年	1800	262,200	555,550			
享和元年	1801	512,600	1,003,140			車輪新調
享和2年	1802	228,350	572,550			
享和3年	1803	231,220	598,100			
文化元年	1804	—	—			
文化2年	1805	—	—			
文化3年	1806	—	—			
文化4年	1807	247,100	818,200			
文化5年	1808	341,770	925,300			
文化6年	1809	315,820	743,110			
文化7年	1810	282,700	737,330			《屋根新調》
文化8年	1811	243,100	1,454,820			
文化9年	1812	250,060	1,115,650			
文化10年	1813	285,430	759,960			
文化11年	1814	370,750	892,620			

※ 史料中には銀、金、銭貨の表記が混じるが、この表では銀貨に換算して表記している

表1 「祇園会入払帳」（三条衣棚町文書）による支出入

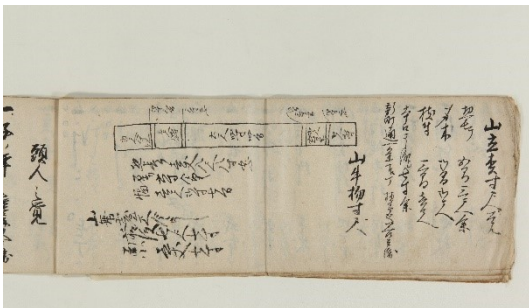


図6 「預物・蔵入置物留帳」（三条衣棚町文書）[文献5]

あくまでも参考であるが、大阪府茨木市の溝咋神社が、紙本金地著色、6曲1双の「祇園祭礼図屏風」[絵画13]を所有されている(注2)。溝咋神社は寛保2年(1742)に社殿が新造されるが、それに寄与した「米屋平右衛門 同喜兵衛」の名がこの屏風にも願主として記されていることから、おそらく寛保2年前後に同社へ寄進されたものと考えられる。そこにはまだ屋根のない鷹山が描かれており、屋根のない時代の鷹山を描いた最後の絵画といえる。

さて、この寛保2年に新造されたであろう日覆の屋根は、『祇園会細記』に描かれた他の曳山の屋根と比較すれば、日覆とはあるもののかかなり本格的な屋根であったようだ。先の塗を施したという記事もさることながら、他の曳山の屋根が天幕を張った風に描かれているのに対して、鷹山のそれは棟が通る木製の切妻屋根で、天水引も一番・二番水引と2枚かけられ、破風部分には^{あげまき}総角結びの房がつけられる。

この時期の鷹山の形状を、『祇園会細記』と記録類を重ねて、できる限り復原してみる。

日覆屋根は鷹遣と犬遣にかけられ、舞台の後方に山洞があり、松(以後真松という)が挿入されていた。この時期の真松の高さは、現在のものと比べれば随分と低かったと推測される。

「預物・蔵入置物留帳」[文献5]には、松の長さや枝振り、そして石持と舞台のサイズを描いた史料がある。

これによれば、松の長さは、全長5間3尺あまり（約10メートル）、そのうちの枝振りの部分が3間1尺（約5.8メートル）、切り口である本口の径が7寸あまり（約21センチ）である。続いて石持のサイズと切れ込み箇所が記される。史料中には「牛物」とあるが石持のことで、その上に乗せられる檜の大きさがうかがい知れる切込のサイズも記される。それによれば全長1丈8尺8寸5分（約5.71メートル）、厚さは金物共で6寸（約18センチ）、1尺2寸7分（約38.5センチ）幅で、現在の曳山の石持と比べると長さも短く、小ぶりである（南観音山6.55メートル、北観音山6.36メートル、岩戸山6.35メートル）。

一方舞台の大きさは、前後7尺7寸（約2.3メートル）、南北1丈7寸（約3.2メートル）とある。鷹山は三条通に東を向いて建てられていたことは確実なので、この史料は、前後と南北の表記を書き間違っているものと思われるが、注目すべきは、すでにこの段階で現代の南観音山の舞台とほぼ同じ大きさであったということである。

[文献5]は年未詳であり、記された部材のサイズが鷹山のどの形状の時代のものであるかは即断できないが、前後の表記から天明2年（1782）の改修以前のものと考えてよいだろう。つまりここに記された真松の長さは、現在の曳山のように屋根の棟上あたりで柱木と真松が接合されるのではなく、山洞に直接挿入されていた日覆屋根時代のものを示していると考えられる。

この時期は人形の衣裳にも変化がみられる。『祇園会細記』では、樽負の姿は山の向こうに隠れて見えないが、鷹遣は烏帽子に狩衣姿、犬遣も烏帽子を被っているのが確認できる。『祇園会細記』と同時期の宝暦6年（1756）の記録「鷹山かざりもの覚」（三条衣棚町文書）[文献3]では、鷹遣は「狩衣、ひわ色紗金／小袖、紺地朝鮮錦／刺貫」、犬遣は「水干、かは色紗金／小袖、鳶色朝鮮錦／刺貫」、樽負は「水干、かわ色紗金／小袖」と記される。これらは、17世紀までの絵画史料で表現される、武家姿の鷹遣・犬遣とは大きく変化してきていることを示している。ちなみに先に紹介した寛保2年頃の作と考えられる「祇園祭礼図屏風」（溝咋神社）では、狩衣、水干とはいかないまでも、烏帽子を被り袴を着用するという様で描かれており、それ以前の姿とは異なる。

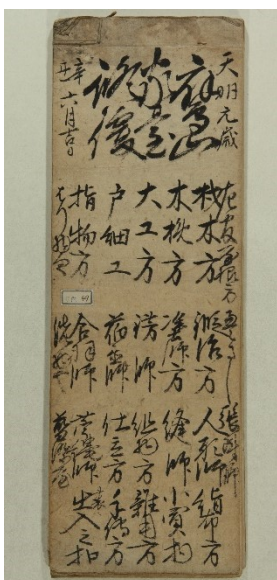


図7 「鷹山家台修復」
（三条衣棚町文書）

[文献8]

4 天明2年（1782）の改修以後 前後屋根の形態

天明2年、鷹山は山洞の上にも屋根をかける。この屋根は後の大屋根とは違い、前後2つに分かれていたことは、三条衣棚町文書のいくつかの記録からも確実である。史料中の表現は多様であるが、ここでは「前後屋根」と表現する。

たとえば「鷹山人形・飾付一式覚」[文献11]は、天明5年（1785）の鷹山の飾り付けの書き上げであるが、なかに「後屋臺天幕」という表記がある。これは天水引に続いて記されており、史料中の表現を借りて示せば〈表屋台にかけられた天水引〉と〈後屋台にかけられた天幕〉であり、軒にかけられる天水引と天井にかけられる天幕が、それぞれ表屋台と後屋台、すなわち前後屋根に掛けられていたことが知れる。

「祇園会入払帳」(表1)によれば、前後屋根は、銀11,140匁(金換算約185両)を費やして建設された(天明2年〈1782〉支払)。その詳細は、「鷹山家台修復」(図7)[文献8]を参考にさせていただきたい。これは屋根を新造するにあたっての、購入部材や手間の支払いの明細を書き上げた横帳で、部材の材質まで細かに記されている。表紙には、払い先の職方が書き上げられている。このなかに「前屋根」「後屋根」といった記述が頻出していることから、前後屋根として改修がなされたことは確実である。ただその形状の詳細については、絵画史料や図面が残されておらずよくわからない。おそらく、前屋根は3体の御神体人形の上に、後屋根は山洞の上にかけられ、これまで露天の山洞に挿されていた真松は、この時から鉾のように屋根を突きぬけてそびえる形になったと推測される。その形態を想像して、図示したのが図8である。

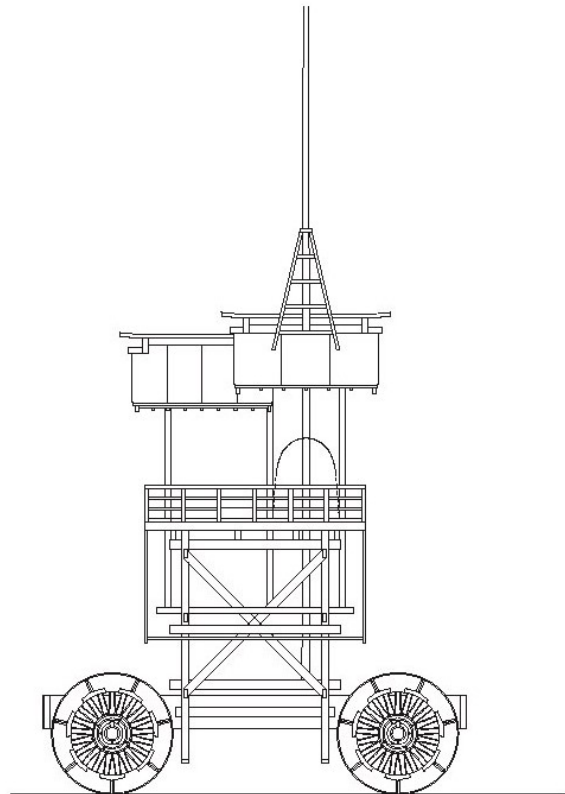


図8 前後屋根時代の鷹山の構造(想像図)

作図：京町家再生研究会

前後屋根への改修は、祇園祭の他の曳山では行われなかった。他の3基は、一気に大屋根へと展開したのである。前後屋根、大屋根への転換は、曳山の鉾化の動きととらえる。鷹山の前後屋根化は、その動きの先鞭となった事例と位置づけることができるだろう。

5 天明の大火後の鷹山 昇山から前後屋根の曳山へ

天明8年(1788)1月に起きた天明の大火は、ほぼ二昼夜にわたって劫火をふるい、京都市中のほとんどを焼きつくした。山鉾町も前祭の町内が甚大な被害を受けるのだが、せっかく前後屋根に改造された鷹山も、被害の程度は不明だが損害を受けたと思われる。京都はたびたび大火に見舞われるが、手運びできる御神体人形や装飾品は助かるものの、重量のある木部は急な搬出が無理なため焼失してしまうことが多い。

この年の夏の巡行は、罹災した山鉾が多く、前祭全山鉾23基のうち占出山など6基のみの、後祭では全山鉾11基のうち鷹山など6基のみの巡行であった^(注3)。数の上からも後祭の町内、すなわち山鉾町の北部の方が、相対的に罹災程度が低かったことは推測されるものの、実際のところはよくわからない。鷹山は、車輪関係の部材が罹災したことから、この年から寛政9年(1797)までの10年間、曳山ではなく昇山として巡行に参加することになるのである。

寛政10年(1798)、鷹山は再び曳山となった。「口上覚」(図9)[文献14]は、曳山へ復帰することを寛政10年3月に雑色に報告した写である。ここには「当町鷹山之儀、去ル申年火災之節、車道具一式焼失仕候ニ付、同年六月より当分人足ニ荷セ、昨年まで毎年差出出来候処、此度如元取繕、当年より以前之通曳山ニいたし差出申度候」とある。

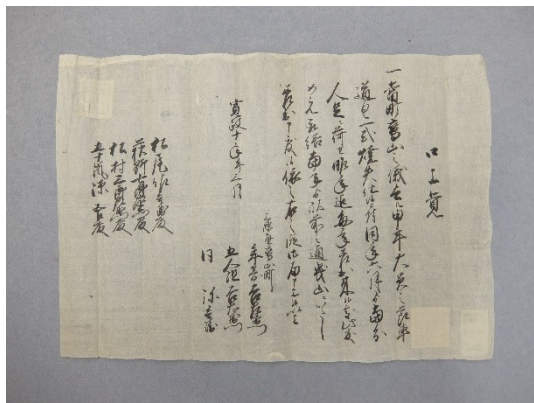


図9 「口上覚」(三条衣棚町文書) [文献14]

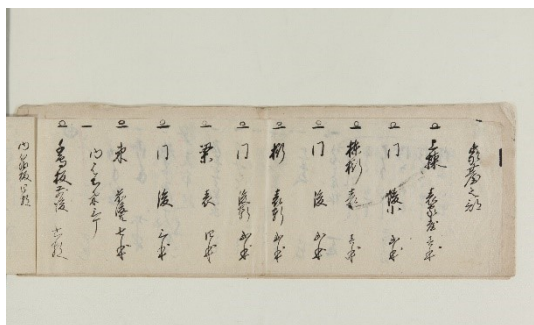


図10 「鷹山道具類預り覚帳」(三条衣棚町文書) [文献26]

この時の屋根は、大火以前同様の前後屋根であったことが次の史料からもわかる。おそらく、屋根自体は焼けなかったと思われるが定かではない。

[文献15]の「山飾附之事」(享和3年〈1803〉)は、鷹山の装飾品を書き上げたもので、これもおそらくは雑色に出した文書の写しである。ここには、「屋躰天水引 猩々緋雲鳳王縫」「後屋躰天水引 白地金更紗」とあり、やはり前後屋根の形状であることがわかる。

また年未詳ながら、干支の記載や装飾品の記載名などから寛政10年頃のものと思われるのが「鷹山道具類預り覚帳」(図10) [文献26]である。これは鷹山の装飾品や道具を、町内でどのように分散保管するかを書き付け記録で、組み立ての道具や足場材まで細かく記載されている。なかに車輪の数が足らず、石持の記載がないことから、天明大火後に、分散所持を徹底して、リスク回避を検討した記録ではないかと推測される。

興味深いことに、部材の数等から屋根の形状がある程度推測できる。たとえば「上棟 表屋臺 壺本/同 後小 貳本」とあるが、これは棟木が後屋根に2本入っており、しかもそれが小さい(短い)ものであることを示す。すなわち、後屋根には真松が突き抜けるので、短い棟木を後屋根の前後に分けて設置しているということを示しているのだろう(あるいは2本の棟木で真松を挟むような形状であった可能性もある)。また「破風 前後 八枚 内付破風貳枚」というのは、前後屋根の妻は都合4か所になるが、各妻の破風は2枚の部材で構成され、そのうちの2枚は重なった屋根の内側(下になる方)にも付いていたことを示しているのだろう。また「家根 表 八枚/同 後 六枚」というのは、前屋根は左右4枚ずつ、後屋根は3枚ずつ、都合14枚の屋根板で構成されていたことを示している。さらに「塗柱 前後 六本」というのは、前後屋根を6本の塗柱で支えていたこと、すなわち前屋根の後方と後屋根の前方は柱を共有していたことを示す。

6 前後屋根から大屋根へ

天明の大火からの復興の過程において、3基の曳山はいずれも大屋根への改造、すなわち鉾化を進めることになった。寛政6年(1794)には岩戸山が、寛政9年(1797)には北観音山が大屋根に改造しての巡行復帰を実現した。ただし、この時期の北観音山は絹張りの障子天井であったようで、文政11年(1828)に現在に続く重厚な大屋根に改造したことがわかっている。南観音山がいつ大屋根に改造したのかはわかっていないが、南観音山が天明の大火から復興するのが寛政8年(1796)なので、おそらくこの時に改造したのではなかろうか。

こうした動きを受けてのことか、鷹山も大屋根に移行した。

文政元年（1818）に記された『祇園會山鉾装鈔』[文献17]には、「屋根 黒塗減金金物 文化七年午六月屋根木地新調 文政三年辰六月金箔置前後草木花極彩色 屋根裏垂木間金箔置源草画」と記載されており、文化7年（1810）に屋根の木地を新調したことを示す。確かに、

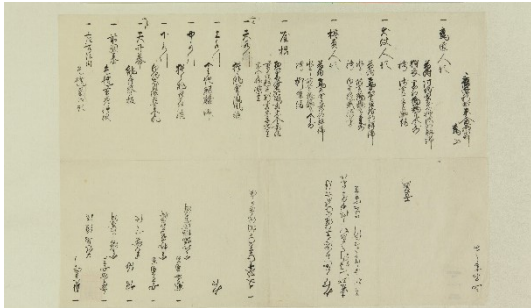


図 11 「鷹匠人形他一式覚」（三条衣棚町文書）
[文献 23]

天保3年（1832）の「鷹匠人形他一式覚」（図11）[文献23]は、鷹山最後の巡行の5年後に作成された鷹山の飾付け記録であるが、それには天水引として「猩々緋雲ニ鳳凰縫」とのみ記されており、前後屋根の時のように前後の屋根で別の水引が掛けられるような記載ではなくなった。すなわち現在の鉾や曳山のように、大屋根の軒に同一の図柄で掛けまわす水引であったと考えられる。

ただ、天水引の図柄である「猩々緋雲ニ鳳凰縫」は、先に紹介した前後屋根時代の[文献11]に前屋根の天水引としてあがる「猩々緋雲鳳王之縫」と同一ではないかという疑問が残る。この点については、大屋根のサイズに合わせて新調した可能性はあるものの、記録としては残っていない。「鷹山屋根塗一式ほか取替届書案」[文献18]は文政3年（1820）に雑色に提出した文書の写で、これによれば、鷹山の屋根を塗り替えた際に新調した水引は欄縁の下にかかる一番水引（史料中には「間水引」とある）であったようだ。

ただ、天水引の図柄である「猩々緋雲ニ鳳凰縫」は、先に紹介した前後屋根時代の[文献11]に

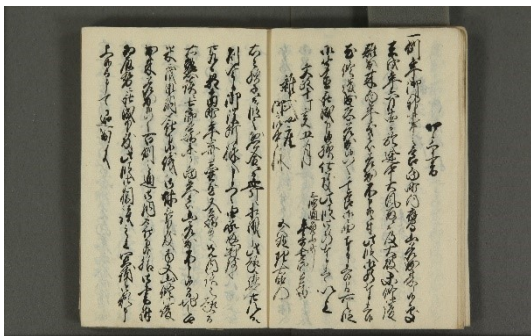


図 12 「鷹山破損につき口上書」（三条衣棚町文書）[文献 20]

文政9年（1826）、鷹山は巡行時に大風雨に見舞われて大破、いわば台風の被害にあったようで、翌年より巡行を取りやめた。「鷹山破損につき口上書」（図12）[文献20]は文政10年（1827）5月、祇園会直前に雑色に提出した、山鉾巡行に出る準備がまだ整わないことを述べた書状の写である。そこには「去戌年六月十四日、於途中大風雨ニ而及大破、未修復難出来、当年義者差出不申候ニ付」とある。以後、毎年のように雑色に出山できない旨を報告し、結局、幕末の元治の大火で人形の一部を除いてすべて焼失、以後「休み山」として現在に至る。

(注1) 安井雅恵「祇園祭礼図に見る絵入版本の力」(『美術フォーラム21』第34号 2016年)

(注2) 茨木市史編さん委員会編『新修茨木市史 第9巻 史料編 美術工芸』(茨木市 2008年)に、詳細な史料紹介がある。

(注3) 祇園祭山鉾連合会編・発行『近世祇園祭山鉾巡行史 改訂版』1974年

2 絵画史料からみた鷹山

小寄 善通

はじめに

鷹山調査委員会では近世のさまざまな絵画史料について検討を行った。しかしながら結論を先に述べると、大船鉾復興では絵画史料が大いに有効であったのに比べると、鷹山の場合は、形状復原に際して絶対的な決め手となる絵画史料には恵まれなかった。特に前後屋根となる18世紀後半の絵画史料が皆無であることも残念なことのひとつである。とはいうものの、染織品や人形衣装の様子について、有益な情報を知らせてくれる貴重な史料を2点確認することができた。

ここでは、絵画史料から判明する鷹山の変遷をたどり、そのうち2点の絵画史料について検討を加えてみたい。

1 祇園祭礼図に見る鷹山

本報告書の史料編絵画リストに見られるように、鷹山を描いた絵画史料は現在20点確認されている。古くは16世紀の「日吉山王祇園祭礼図屏風」(サントリー美術館) [絵画1]に始まり江戸時代末期の錦絵まで、いずれも祇園祭礼図後祭の一部として描き継がれてきた。

これらの内、寛保2年(1742)ころの制作と考えられている「祇園祭礼図屏風」(茨木市溝咋神社) [絵画13]までが屋根の無い形式の鷹山を描いている。17世紀後半から18世紀前半にかけて制作された作例に見られる鷹山の描写について特徴的なことは、承応年間(1652~55)ころに刊行された『祇園御本地』 [絵画4]に描かれた鷹山の描写が基本となっている点である。山全体の描写角度はもちろんのこと、鷹遣、犬遣、樽負の3体の人形と鷹、犬、雉の配置、さらには人物の配置、しぐさなどもほぼ共通する。広く流通する版本を手本として多くの祇園祭礼図が制作されたことがうかがえる。ただし、『祇園御本地』は前祭にも八幡山を描くなど、基本的な部分で正確性に欠ける点があり、当時の実態を正しく写し取っているとは限らない。鷹山においても、『祇園御本地』から図様を借用したと考えられる作例では進行方向右側後方に人形「樽負」を描いているが、その配置位置については疑問が残る。

宝暦7年(1757)刊行の『祇園会細記』 [絵画14]は記述内容も多様かつ豊富で、当時の祇園祭の実態を如実に知らせてくれる貴重な史料である。そこでは鷹山は天水引を伴った屋根をもつ姿に表現されている。「樽負」も山の向こう側に大きな粽のみを見せる。絵画表現の上では目立たない「樽負」となるが、くじ改め場との位置関係を考慮すれば、これが本来の人形配置を伝えているものと評価したい。

このうち文化3年(1806)に『諸国図会年中行事大成』 [絵画15]が刊行されるまでの半世紀、鷹山を描いた絵画史料は確認されていない。屋根の姿がどのように変化し、19世紀前半の形になるのかは不明であるが、『諸国図会年中行事大成』に描かれる鷹山は現在の両観音山を髣髴とさせる堂々たる屋根をもつ姿として表現されている。

19世紀の作例として注目されるのは、横山華山筆「祇園祭礼図巻」[絵画 17]と嘉永元年(1848)制作の冷泉為恭筆「祇園祭礼図巻」[絵画 19]である。18世紀後半に円山応挙が登場して以降、京都画壇においては写実的な作風が流行するが、岸駒や呉春、曾我蕭白などからの影響が認められる横山華山も写実的な作風を持つことで知られている。一方の冷泉為恭の作風は復古大和絵と称され、写実的にもものを捉えるのではなく、古画の伝統を重んじる傾向に特徴をもつ。19世紀に描かれた鷹山のなかで、ただ一つ唐破風屋根として描かれた為恭の作例も、江戸時代中期以降「鷹遣」を源頼朝や在原行平になぞらえるようになった鷹山に古典的な雅な風情を与えたかったのかも知れない。

以上、絵画史料からみた鷹山は、18世紀後半に大きくその姿を変え、屋根を持つ山へと変貌したことがうかがえた。そして今回、屋根を持つ形状の鷹山として、参考となり得る絵画史料には次に詳述する横山華山筆「祇園祭礼図巻」が挙げられる。

2 「祇園祭礼図巻」 2巻 横山華山筆 個人蔵(図1)



図1 横山華山「祇園祭礼図巻」下巻
「鷹山」(個人蔵)

紙本著色による本図巻は祇園会の山鉾巡行、神輿渡御、宵山の光景などを横山華山(1781あるいは1784～1837)が卷子装2巻に描いたものである。上巻が縦31.7cm、全長1456.0cm、下巻が縦31.8cm、全長1487.0cmに及ぶ大作である。画中に描かれる綾傘鉾が曳鉾として描かれていることから、本図巻は同鉾が小型の曳鉾に改造された天保5年(1834)6月以降、華山が没する天保8年(1837)3月までの間に制作されたことが判明する。本図巻は全体的に図様が精緻に描かれており、懸装品なども実際に現存するものとの照合が可能なものも認められ、図としての信頼度も高いように思われる。

本図巻における鷹山は進行方向右前方から捉えられており、下水引から真松に至る部分が描かれ、前懸の一部がわずかに見える。実は本図巻が制作された時期、鷹山は既に居祭となっていることから、本図における鷹山の描写の信頼度については検討を要する。実際、本図巻では鷹山に、山には本来存在しない禿柱が鉾と同様に描かれている。この点は鷹山だけではなく本図巻の南観音山においても同様であることから、華山は山の構造については関心が薄かったとも考えられよう。それでも本図に注目する理由は、本図に描かれる懸装品が正確に描かれている可能性が非常に高いからである。

本図における鷹山の懸装品の描写に注目してみると、天水引は赤色地に鳳凰と雲、一番水引は茶もしくは金地に麒麟に雲、二番水引は赤色地に蔓状の草花、三番水引は白地に桐の図様を描いている。これを三条衣棚町文書のなかの「鷹匠人形他一式覚」(天保3年〈1832〉)[文献23・24]と照合してみると、見事に一致するのである。同文書によると天水引は「猩々緋雲ニ鳳



図2 横山華山「祇園祭鉾調巻」(京都市立芸術大学芸術資料館蔵)

鳳縫」、一番水引は「金地麒麟錦」、二番水引は「猩々緋唐花縫」、三番水引は「白地大内桐唐草金乱」となっている。このことから本図製作に当たって、華山は居祭であった鷹山の宵飾りを実際に見たであろうことが推測される。華山が綿密な実地観察のうえで本図巻を制作したであろうことを実証するもう一つの根拠がある。それは、京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する本図巻の下絵(図2)である。残念ながら所蔵されるのは前祭の分の

みで鷹山は登場しないのであるが、そこに描かれた前祭の山鉾の描写には、本画制作に資するための数多くの部分写生図や、懸装品をはじめとする様々な装飾についてのデータが細かく記されているのである。

ここで少し疑問となるのが、本図巻に描かれる鷹山の前懸の描写である。周囲に緋羅紗を回した前懸は、水引と比較するとその描写密度が格段に低下しており、図様の詳細をたどることは困難である。先述の町内文書に前懸は「毛氈草花模様」とあるが、本図巻の描写を見る限り、華山はその現物を宵飾りで見ていないか、もしくは当該前懸が著しく損傷を受けていた可能性が高いように思われる。

3 「鷹山御神体人形図」1幅 公益財団法人鷹山保存会蔵(図3) [文献22・絵画16]



図3 「鷹山御神体人形図」((公財)鷹山保存会蔵)

本史料は近年新出し、その後鷹山保存会所蔵となったもので、その内容から文化9年(1812)ころに新調された人形衣装について克明に図示したものである。内容の詳細は御神体人形部会の報告に譲るが、ここでは本史料の基本情報について触れておきたい。以下に本紙、表装および箱に記された年号、人物名等を列記する。

- ・本紙
 - 画面右端に「天保二辛卯林鐘十四日写」
 - その左側に「信直敬」 白文連印「華園」「信直」
- ・画面上部表装一文字
 - 「写し於くもの かけ晝と なりけるを かくとて ひめおくを 見せて 耻かし 土用干 己未仲夏 秋華圓」 白文連印「信」「直」
- ・箱蓋表
 - 「祇園會太郎山人形寫生 晝幅」
- ・箱蓋裏

- 「題匣面 乾齋 紀廣健」 白文方形「廣健信印」印 朱文方形「乾齋」印
 ・箱側面（2か所に所蔵票貼付）
 「番号 二二九 品名 紙横物 作家 紀廣成 題 太郎山人形写生」（ 部分は墨書）

「第百八十口 太郎山人形」（朱文方形「澤渡所蔵」印を伴う）

本史料の制作年代は画面に「天保二辛卯林鐘十四日写」とあることから、天保2年（1831）6月14日、まさしく後祭の当日であり、鷹山は既に居祭となって5年目であった。本史料が実物を前にして記されたことを示すものとして貴重な紀年銘である。実は、この「天保二辛卯林鐘十四日写」と記された部分の紙は、その左方の人物名を記した部分とは別紙のようであるが、他部分との書体の比較からもともと一体のものであることは疑えない。

それでは作者は誰であろうか。本紙にある白文連印「華園」「信直」を伴う「信直敬」なる人物は、画面上部表装一文字に記される白文連印「信」「直」を伴う「秋華園」なる人物と、「信」「直」や「華園」といった名、号などが共通することから同一人物であると考えられる。また、表装一文字に記される文言は、その内容から判断して本史料が掛幅に仕立てられた際に本図作者自身が執筆したものであるのが適当であろう。そしてその年代は同じく表装一文字に記される「己未仲夏」から安政6年（1859）5月と判明する。さらにこの一文の中の「見せて耻かし」という文面から判断して、本図が職業画家の手になるものである可能性は少ないと思われる。

また箱書等から判明するのは、一時期本史料の作者が紀広成であるとの伝えがあったことと、本史料がかつて澤渡家の所蔵であったこと、さらに箱書を紀広健なる人物が行ったことである。紀広成（1777～1839）は山脇東暉とも称する四条派の画家である。本図が描かれた天保2年（1831）には未だ存命で、四条西洞院西入に住しているが、彼が「信直」と名乗った史料は存在せず、また本図が掛幅に仕立てられた安政6年（1859）には既に没していることから、彼は「信直」と名乗る人物とは別人であり、本図の作者とはなり得ない。紀広成には妻子が無かったことから、跡目は甥の澤渡精齋（紀広繁、1808～1885）が継承した。官人でもあった精齋は明治初年ころ東京に居を移し、跡は澤渡素軒（紀広孝）が継いだという。箱書を行った紀廣健はこの系譜に連なる人物であろう。これらを総合すると、本史料の作者は澤渡家周辺にいた絵心のある文化人ということになるだろうか。しかしながら、上記のデータに適する人物は残念ながら現在のところ確認できない。作者については後考に俟ちたい。

参考文献

八反裕太郎「横山華山の画業展開に関する一考察—「祇園祭礼図巻」をめぐる—」『國華』第1417号 2013年

